

高等学校公民科における 「合理的意思決定力」を育てる授業実践 —積極的社会参画のできる市民の育成をめざして—

学籍番号 159979
氏名 三島 寛子
主指導教員 田中 満公子

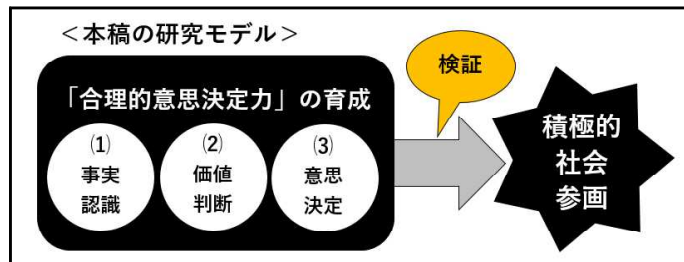
1. 本研究の背景と目的

グローバル化の進展にともなう社会的課題の増加や、2015年の公職選挙法改正を重大な社会的背景として、よりよい社会の形成に参画していくような、社会に対する能動的なアプローチができる高校生の育成が求められている。

そういった背景の中で、今日、シティズンシップ教育や主権者教育といった社会参画に関わる教育の注目度が高くなってきた。2016年には、文部科学省が総務省とともに生徒用副教材を作成・公表し、全国の高校生に配布して、学校現場に主権者教育を課すに至っている。しかし一方で、この副教材に生徒の意思決定軽視の傾向が残るとの指摘がなされている点は注目すべきであろう。社会科教育やシティズンシップ教育の先行研究においても、積極的社会参画のためには、意思決定する力の育成が必要であることはこれまでも述べられてきているからである。

それをふまえて実習校の生徒について先生方への聞き取り調査やアンケート調査、授業者として生徒観察をした授業実践Aからは、生徒たちは“自分の考え・意見に対する自信のなさ”によって積極的社会参画を阻まれている課題の存在が浮かび上がってきた。

そこで筆者は、学校現場で生徒に意思決定能力、特に感情などに左右されない合理的な意思決定能力（以下、「合理的意思決定力」）を育てる授業実践を行うとともに、実習校の生徒たちの積極的な社会参画意識の向上に寄与することができるのか検証することとした。これが本研究の目的である。



2. 「合理的意思決定力」の育成をめざす授業実践とその成果・課題

「合理的意思決定力」とは、科学的な事実認識と反省的吟味にもとづく価値判断をふまえて、合理的に物事を決定する能力であるとされ、「合理的意思決定力」には、(1)事実認識、(2)価値判断、(3)意思決定という3段階が内包されていると考えられる。

授業実践Bでは、(1)事実認識の段階を重視し、計3時間で現代社会の「平和主義とわが国の安全」・「こんにちの防衛問題」の単元を扱った。その際、「合理的意思決定力」育成の手立てとして特に工夫した点は、毎授業の最後に丁寧な個人ワークを組み込んだことと、意見交流のグループワークを取り入れ、他の人の意見を聞いて自らの意見を省みる機会を

提供したことである。その結果、授業の主なねらいとして設定した(1)事実認識の深まりは多くの生徒に見られたが、「合理的意思決定力」全体を育成するためには、続く(2)価値判断・(3)意思決定の段階にも重きをおいた授業デザインが必要であることが分かった。

その反省をふまえて授業実践 C では、「日本の今後のエネルギー政策を考えよう」というテーマのもと(2)価値判断・(3)意思決定の段階に重きを移し、模擬閣議・模擬投票の活動を取り入れた授業実践を行った。その結果、1 つめの実践よりも多くの生徒たちの中に(3)意思決定段階の達成が見られた。それは一定の成果であるが、その一方で、望ましく(1)事実認識・(2)価値判断段階を達成する生徒とそうでない生徒に差が生まれてきたという課題が残った。これは、(1)事実認識段階と(2)価値判断段階との関連づけの不十分さという、筆者の授業デザインの課題によるものが大きかったと言える。

よって本実践からは、すべての生徒に「合理的意思決定力」を育むためには、授業実践 B、C の要素を組み合わせることが必要であるという結論に至った。個人ワークによる内省の場をしっかりと設定し、生徒一人ひとりが事実認識を深められた状態を担保したうえで、模擬閣議などの価値判断・意思決定場面を多く取り入れた実践を行うことにより、よりいっそう生徒の「合理的意思決定力」を育てることができると推測できよう。

3. 「合理的意思決定力」の育成と積極的社会参画促進

そして最後に、以上の授業実践を通して生徒の意識がどのように変わったかを生徒へのアンケート調査から分析し、彼らの積極的社会参画促進のためには「合理的意思決定力」をめざした本実践が有効なアプローチとなりうるか、という点の検証を行った。その際、実習校の生徒の課題をもとに、以下の 3 つの観点を調査項目とした。つまり、①自分の考え・意見を深まったものと自覚することができるか、②自分の考え・意見に自信がもてるか、③意見表明の意欲がわくか、である。

結果としては、「合理的意思決定力」の育成をめざした授業実践によって、生徒に自らの考え・意見の深まりを自覚させることで、生徒が自分の考え・意見に自信がもてるようになっていったということは明らかになった。ただ、それにより意見表明の意欲が起こってくるか、という点に関しては課題が残ったが、授業前に比べて授業後は数値的伸びは見えてきていることから、こういった授業を積み重ねていくことで、生徒の中に積極的な社会参画意識の向上も望めるのではないだろうか。その意味で、意思決定の経験の蓄積から「合理的意思決定力」の育成をめざした授業を行うことは、生徒の積極的社会参画促進への有効なアプローチとなりえるだろう。

4. 本研究の成果と課題

以上、本研究では、「合理的意思決定力」育成をめざした授業実践を行うことで、生徒の積極的社会参画意識にどのようなアプローチができるかを考えてきた。もちろん授業デザインの改良は必要であるものの、このように意思決定場面や他の人との意見交流の場面を多く設定した授業実践をすることが、生徒の社会参画意識に影響を与えることができるという展望ももてた。ただ、今回設定した社会参画意識についての 3 つの観点は、あくまで筆者が関わった生徒たちの姿から設定したものである。生徒の「合理的意思決定力」と積極的社会参画意識の育成をめざした授業を実践する際には、目の前の生徒をよく観察し、生徒たちがどのような課題をもっているかしっかりと分析したうえで行う必要があるだろう。